

白耳義のベトナム人

中島八十一

ベルギー

ブリュッセル

一九八十年代中頃白耳義王國首都比律悉に在したり。大學四階の實驗室は遮光防音にて休憩に外の景色見得る窓際に移るを常とす。實驗助手の阮君^{グエン}比律悉自由大工學部卒の秀才にて、余と同い年なり。實驗室の一角占むるコンピューターを驅動するは阮君^{グエン}の役割にて餘人の係り得ざることなり。そのコンピューター今日となりては三十二ビットノートパソコンに機能劣るは宜なるかな。

グエン

大學の裏手に葬儀屋在り。ある時店の前に靈柩車停むる景色を見るに阮君今日はイスラムかと眩けり。何故と問へば車の屋上に掲ぐる十字架外したれば異教徒の葬儀なりと答ふ。晝は阮君^{グエン}余伴ひて學食に赴き月々日數分の種類用意するスープを品定めし、ムール貝出づれば喜びたり。食後再び四階に戻りて二人揃ひて外を眺む。ある時隣地建造物の解體始まる。持ち込みたる建機に大なるKOMATSUのロゴあれば、阮君^{グエン}コマツ知るやと余に低き聲にて問ひ、續けてアンドレ・マルローの1927年に上海にて共產黨員起せし暴動基にする小説「人間の條件」知るやと續けり。コマツとさる物語の關係を理解せざる余の返答に力無くその場はそのまま終りたり。

一體に當時のベトナム人にこれまでの経緯を尋ぬるには憚りあり、問はず語りに話すを斷片的につなぎ合はするばかりなり。サイゴン（セゴン）の生まれなること、今日なほベトナムのバスポートを所持すること、大學にて一年留年したること、難民ゆゑに就職困難の窮狀見つる社會學部教授の口利き有て今在る研究室に職見つけしこと、父親ニューズウィーク誌の記者したること等々。爾來三十餘年、余思ひ立ちてマルローの人間の條件を繙くに主人公は日佛混血にて中國在住のキヨなり。コマツの名はいづくにも見えず。阮君^{グエン}の言ひたきこと分らず終ひとなるはずなりき。思ひ絶えむとするその折人間の條件の表紙に譯者小松清とあるに氣付けり。小松清なる人物の系譜探りたればマルローと親交あり、日本の佛印進駐の頃ジャーナリストとしてサイゴンに幾年か滞在せり。余即座に阮君^{グエン}にメール送りたり。折り返し小松清の膝に乗る三歳或いは四歳と見ゆる阮君^{グエン}の寫真メール添付にて届きたり。阮君の日本人なる余に向ける親昵の所以を今にして理解す。

大學に向ふ七十一路線のバス停に立つ余に六十代の乞食に見紛ふ身なりの男近づけり。^{ブリュッセル}

余比律悉滞在程なくして日中韓越の人種を見分くるを得るに至れり。いづれも大乘佛教の國とは知れり。この老人ベトナム人なり。日本語にて低く余に問ふ。日本人なりや。いか

にも。さのみ聞き届くるやそのままその場離れ顧みることなし。何を思ひたりや解し難し。
ブリュッセル
當時比律悉に在する日本人六千人。よくぞ余を選びて聲を掛けたる。何を思ひ立ちて日本
語を發したるらん。實驗室にてグエン阮君に訊くに大戦中日本軍にて働きたることありけむと
ぞ答ふ。戦後四十有餘年。何時白耳義ベルギーに來たりしや、今日如何様にして生計立つや、想像
を越ゆること果てしなし。なれど斯くの如きは特段ベトナム人に限らざることフジコ・ヘミ
ングの例擧ぐるまでもなく、歐洲各地を彷徨ふ日本人珍しからず。

ある夜レストラン多く集まる繁華街歩きたるに、一瞬間がりに差し掛かる際細き脇道か
ら背高きベトナム人の若者余の前に現はれたり。拙きフランス語にて余に問ふ。我只今ここ
に著きたり。他の者いづくに在りや。余即答す。我日本人なり。これのみ聞くや身を翻し再
び闇に紛れき。仲間に聲掛くるにフランス語とは何故ぞ。ボートピープルの時代なり。運命
を開拓せんとて新天地を求むるは極めて自然なり。徒に難民移民を感傷の海に投げ入れま
じ。如何なる事情も安易には問ふまじ。

(令和七年一月十一日受附)